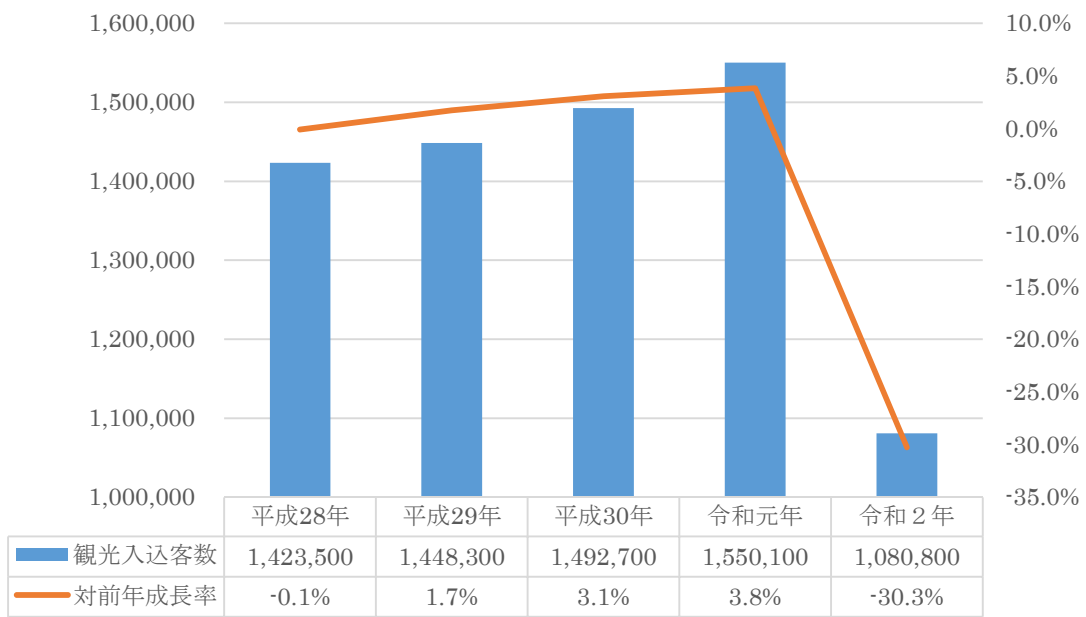


現行の「野洲市観光振興指針」について（課題検証）

5年間の検証結果（平成29年4月～令和4年3月）

【野洲市延観光入込客数】



野洲市の観光入込客数は、観光振興指針を策定した平成29年から入込客数が過去最大となった令和元年の3年間で約10万人増加しており、毎年増加傾向にありました。その要因は、元来観光ニーズが大きい希望ヶ丘文化公園を始めとする「スポーツ・レクリエーション」部門に関するイベント・行事が増えたことに加えて、日本各地で地震や気象災害が多かった期間であったものの野洲市の観光地においては影響が少なかったこと、令和の元号改元の際に10連休となるゴールデンウィークがあったことなどが挙げられます。

しかし、令和2年1月から新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、国内外問わず移動の制限がされたことから令和2年の観光入込客数は前年比マイナス47万人と大幅な減少となりました。

【観光振興における課題に対するアプローチ】

現在の「野洲市観光振興指針」第3章 4.観光振興における課題(P16~P17)、第4章(P19~P24)より抜粋。

(1) 知名度の低さ

より効果的に知名度の向上を図るため、湖南4市（草津市・栗東市・守山市・野洲市）で連携して滋賀県内外へ特産品の紹介、観光情報の発信などに努めています。特に令和3年3月には、湖南4市全体の観光マップを作成し、中山道を中心とした観光周遊ルートを情報発信することで、今後も継続的に広域での観光誘客に期待が持てます。

また、令和4年1月から放送予定であるNHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』を契機に、平家フォーラムの開催や周遊パンフレットを作成し、「平家終焉の地」としての野洲市をより広く発信し、機運を高めます。

(2) 情報発信の不足

近年のSNSの普及に伴い、情報発信方法の多様化に対応すべく平成29年4月に野洲市観光物産協会ではInstagramを活用した観光情報の発信を開始しました。令和3年5月時点では、1投稿当たり600前後の閲覧数となり一定の効果が見込めるものの、野洲市近隣在住の年齢30~50代の閲覧者が多く、普段から関わりが薄い滋賀県外在住者や、SNSの利用が比較的少ない年齢60代以降を対象とした情報発信には今後も地道な活動が必要であると考えられます。

(3) 交通等の不便

野洲市内を周遊するための交通手段が限られていることから、自転車を活用した市内観光を推進しました。平成31年3月に自転車で巡る観光ルートを作成した「ヤスイチ」MAPを作成し、MAP特典を付けることで市内店舗への来客を誘致しました。コロナ禍においても自転車観光に対するニーズは高まっており、令和3年度は野洲市内の自転車周遊ルートの見直しを行う予定です。一方で、観光利用可能なレンタサイクル事業者が野洲駅南口前の1事業者のみであり、遠方からの観光客に対する自転車利用促進に課題が残ります。

(4) 通過型観光

「体験等を通して長時間市内に留まってもらうことによる、経済循環が出来る仕組みが構築されていません。」という課題については、野洲市内には貴重な体験型観光スポットがあ

るものの「経済循環が出来る仕組み」までは現状としては構築できていません。

令和2年度に野洲市観光物産協会主催にて開催したバスツアーが好評であったことなどを踏まえて、今後、例えば、魅力あるテーマ設定による「野洲市内ミニツアー」などを継続して開催するなどし、(宿泊でなくでも、日帰り)滞在型観光等に繋がる展開を検討できればと考えます。

(5) 地域社会の重要性(市内間の連携不足等)

野洲市で生まれ育ったとしても、同じ野洲市の異なる地域(学区)の観光や体験については、意外と経験する機会がない状況です。例えば、小学校3・4年生で社会科にて副読本「わたしたちの野洲市」を通じて野洲市の歴史や自然、文化等を学ぶ機会がありますが、学校卒業後に市内の他学区へ出向いて何かを経験するというチャンスは少ないです。野洲市民が地元野洲市のことをもっと知り、体験・感動できるチャンスをつくることで、その体験・感動を語り継いでいける人材育成が必要です。そして地域社会に愛着と誇りをもって育った市民によって、将来の野洲市の観光が大切に守られ、また、市内、他市、全国、世界へと広がっていくことに繋がります。

また、野洲市では、「野洲市ボランティア観光ガイド協会」より、野洲の歴史・文化や史跡の案内や古くから地元で伝わる伝説等を紙芝居や人形劇にて上演し、『おいで野洲のころ』でおもてなししています。その活躍が讃えられ、平成30年度観光物産事業功労者の優良観光・物産団体として表彰されました。

(6) おもてなしと街の魅力づくり

上記(5)のとおり、「野洲市ボランティア観光ガイド協会」等を通じて、「おいで野洲」のメッセージとおもてなしの心で野洲市の魅力を人から人へ、心から心へ語り伝え、野洲市の光(宝)を知る人を今後も増やしていく必要があります。